

トークによる異文化理解と問題発見学習

学生の思考回路を形成し、気づきを育むアウトプット型の教育方法を探し求めて

清水 豊子

(千葉大学教育学部英語科)

1. インプット中心の「伝統的な教育パラダイム」の限界

大学教育に黄信号が点灯して久しい。筆者の経験（とりわけ入試問題作成や学生と共に創る授業の）からみても、この十数年間に、大学生の英語力も人間的な諸能力（想像力・理解力・思考力・創造力など）も低下の一途を辿っている。母語・外国語を問わず「読む」という知的行為は大学生が最も苦手とするところである。大学に入るまで本らしい本を読んだこともなく、自ら「考える」という思考回路を育てていない学生が大半を占める時代になり、かつては自明の理とされた「大学生は自力で読んで考える過程を形成できる存在」という大学教育の前提は崩れてしまった。学力低下だけでなく、学力という骨格部分を柔軟に支える人間的諸能力の未開拓・未成熟も、大学教育の大きな障害になっているということだ。彼らの外国語や異文化理解の課題に取り組む力はこの10年間でみるみる弱まり、伝統的な教授法だけでは、授業はうまく機能しない傾向にある。

現に、筆者は数年前、20年来続けた「シェークスピアの作品講読」と「現代英米戯曲の上演」の2つの演習を止めざるを得なかった。前者はテキストを原語で読むという伝統的なインプット型の演習であるが、それが学生にとっては難解な課題となって、彼らの理解が伴わなくなった。後者は、講読に留まらず、テキストの演劇的表現をめざす演習であり、インプット中心の従来の教授法とは全く異なる。これは読むだけでは理解が浅くなるときに多様な思索を促し、異文化理解を深めることのできる究極のアウトプット型の教授法であった。しかし、学生の意欲・知力・他の諸能力が年々弱体化したため、上演に至るまでのすべてのプロセス（テキストの速読、翻訳劇あるいは英語劇の上演台本づくり、台詞の暗記、役割演技、対話の演劇的表現、演者間のアンサンブルの創出など）を全うすることは不可能になった。学生にとっては課題が大きくなりすぎて、1990年代半ばを過ぎると、こなせなくなったのである（清水、2004）。

もとより、実学志向の著しい昨今では、教養の根幹となる虚学（たとえば、外国文学）の知識体系を一方向的に伝授するインプット型の講義も困難になっている。

2. アウトプット中心の「新たな教育パラダイム」の模索と創造

こうして、数年前から、その時々々の学生たちのニーズと力量を勘案しながら、「読む」行為（インプット）を基本に据えた新たなアウトプット型の教育方法の試行錯誤を続けてきた。一体どういう授業を行ったら、今様の学生の「読み、考える」経験（インプット）や「自己表現やコミュニケーションを通して学ぶ」経験（アウトプット）を可能にして、その結果として自己意識の拡大をはじめとする「心の（精神的な）成熟」へつなげられるのか、という思いであった。最近ようやく、一年次教育でも、専門教育でも、「トーク」や即興のドラマを使った方法論に手応えを感じつつある。

トークは、主張を競い合うディベートとは全く異なり、終始理詰めには議論するディスカッションともかなり違う。あえて定義をすれば、トークとは、「小グループの親密な関係のなかで、雑多な知識をもとに探究的な態度で考えを進めながら、何かを洞察しようとする即興の会話」である。物事を断定的に論ずるのではなく、お互いに見えない何かを見つけようとするような姿勢で語り合う。もちろん、テキストに基づく論理的な論議も欠かせないが、言語芸術に関する限り、感覚的な印象や直感的な思いつきもグループ全体の理解を深め、新たな創造的解釈を生み出す可能性があるからだ。

簡潔に言えば、筆者は、教師と学生との相互作用とは別に、学生同士の相互作用のなかでも学び合う関係を成立させて、学生の学習意欲を引き出すと同時に、学生が多様な認識の有り様に気づき、主体的に学びを自己の内面に定着させることをねらっている。

こうしたアウトプット型の教育方法論（とりわけ「トーク」の手法）の開発は、理論的には、人間の精神発達と学習を人との相互作用的視点からとらえるヴィゴツキーの「最近接発達領域」論を背景に、ブルーナーの「教育の過程」論 (Bruner, 1960)、バーンズの「トークによる学習」論 (Barnes, 1975)、マローンの「トークによる自我形成」論 (Malone, 1997) などを具体的な拠り所にして、実践的模索を続けた結果である。また、「イギリスのドラマ教育」の現場（小学校から大学まで）を幅広く視察し、論じた経験などにも大きく影響を受けている（清水、1989）。なお、昨年読んだジョンソン著の『学生参加型の大学授業』（玉川大学出版部）によれば、アメリカ流プラグマティズムからみれば、本教育実践はいわゆる「協同学習」の部類に入ると位置づけられそうだ。

3. 学習意欲・学びの主体性を引き出す学生本位の授業

筆者はこの方法論を、英書講読の演習に限らず、他の授業にも積極的に適用している。数年来、学部のカリキュラム改革も重ねられ、筆者の担当科目はかなり変わった。(以下に、「以前の科目名」→「現在の科目名」を示す。ただし4年次・大学院は除く。) 本発表では、このうちの3種類の全く異なる授業に共通する具体的な方法論について論じたい。

1年次「英米文学演習Ⅰ」	→	1年次「英語科教材研究Ⅰ（音声・ドラマ）」
2年次「英米文学演習Ⅱ」	→	1年次「言語コミュニケーション教育」（半期） 2年次「ドラマ教育」（半期）
3年次「英米文学演習Ⅲ」	→	3年次「英米文学セミナーⅢ」 「英米文学特殊講義」etc.

主な参考文献

Bruner, J. 1977(1960) *The Process of Education*. Harvard U.P.

Barnes, D. 1988(1975) *From Communication to Curriculum*. Penguin

Malone, M. 1997 *Worlds of Talk-The Presentation of Self in Everyday Conversation*. Polity Press

清水豊子 1989 「教育に真のコミュニケーションを求めてードラマの授業ではなぜノン・テキストが主流なのか」他、『演劇と教育』1～7月号、晩成書房

清水豊子 2004 「自己表現とインターアクションを通じた大学生の学び」 溝上慎一編『学生の学びを支援する大学教育』東信堂